

あたって指導的役割を果たしたが、昭和六年にはトレドー市、ニューヨーク市、サンフランシスコ市からも開催の申し込みがあった。そこで正木は政府（文部省）と協議の上、米国とわが国の美術界との掛け橋である岡倉天心ゆかりの日本美術院の横山大観を米国に派遣しようとしたが、大観に支障が生じたので、大観の推薦によって天心の弟である岡倉由三郎が派遣されることになったのである。本校講師として公務で出張するというかたちをとったのは正木の政治的配慮によるもので、岡倉天心記念銅像の建設といい今回のこの措置といい、退官を控えた正木の、日本美術院と官設展および本校との融合を図ろうとする姿勢を示したものと見えよう。なお、後述（608頁参照）のように岡倉由三郎の渡米は下村観山筆「天心岡倉先生」草稿が本校へ寄贈される一つの契機となった。

⑩ 日本版画協会設立と本校版画科設置運動

日本の近代版画発展の基盤となった日本創作版画協会が大正八年に創立し、本校に版画科を設置することを活動目標に掲げたことは既に本書第二巻（786頁）に記したが、その後版画を試みる人が増え、関心が高まるにつれて、版画科設置問題も次第にクローズアップして来た。特に山本鼎はこれを強力に提唱した一人で、「版画展覧会を見て美校に版画科設置を熱望す」（大正十一年二月十七、十八、二十日『読売新聞』）などを読むとその熱意の程が窺われる。

昭和二年、第八回帝展の第二部（洋画）に初めて版画の出品が受理されて官設展でも版画家の活躍が始まった。このときの版画出品者は間部時雄、寺崎武男、諏訪兼紀、恩地孝四郎、前川千帆、吉田

博、織田一磨、永瀬義郎、亀井藤兵衛、野村俊彦、渡辺光徳らであった。こうした気運に促されてか、本校内でも翌三年春に校友会文芸部臨時部の一つとして版画部（椎ノ木社）が生まれ、彫刻科、西洋画科の生徒数名が和田季雄、鈴川信一らの指導の下に毎学期一回の小展覧会を開くようになった。部員の三木凱歌が『東京美術学校校友会月報』第二十八巻第三号に寄せた活動報告の中に「當校に西洋畫科の副科として、版畫部設置の論が起つて居る折柄、自分等はそのさきがけとなるべく努力したいと思ひます。」と記しているところを見ると、昭和四年七月頃には校内にも版画教育開始の兆しが見え始めていたものと思われる。翌五年春には本校教授岡田三郎助をはじめ、大久保作次郎、織田一磨、小出檐重、田辺至、寺崎武男、中村研一、間部時雄、渡辺光徳らが同人となって洋風版画会を起し、五月に第一回展を開いた。また、同年秋には留学以後盛んにエッチングの研究、制作を試みていた田辺至が『東京美術学校校友会月報』第二十九巻第五号に「エッチングの技法」と題する詳細な論文を寄稿している。これらはその気運を一層盛り上げたことと思われる。

昭和六年一月八日には日本版画協会が設立された。同会は日本創作版画協会、洋風版画会その他が合併して成立したもので、会長は岡田三郎助、常務委員に恩地孝四郎、碓伊之助、田辺至、前川千帆、平塚運一、山本鼎、清宮彬が就任した。そして、国際版画展覧会の開催、定期的版画展覧会の開催、学芸的版画の研究および東京美術学校に版画科を新設する運動を起すことを活動目標に定めたのであった。第一回展は同年九月に開催され、大きな反響を呼ん

だ。

本校の校友会版画部はこの年の四月二十七日に石井鶴三を招いて木版画技法に関する講演会（要旨は月報第三十巻第五号所載）を開き、また、摺師を招いて実演を見学するなどした。翌七年七月十六、十七日には講堂前廊下で第十四回版画部展覧会を開催。水船六洲ほか十二名の作品と織田一磨、前川千帆、石井鶴三の特別出品および和田季雄のフランス版画の出品を並べて展示し、恩地孝四郎を招いて批評会を開いた。次いで同八年二月六、七日には同じ場所です現代創作版画展を開催。部員たちの奔走により石井鶴三、永瀬義郎、清水孝一、畦地梅太郎、恩地孝四郎、長谷川多都子、織田一磨、碓伊之助、安井曾太郎、梅原龍三郎、川上澄生、藤森静雄、前川千帆、川西英、平塚運一、逸見亨、深沢素一の作品を陳列し、森田亀之助はエビナールの版画の本を特別出品した。部員の佐伯留守夫の報告（月報第三十一巻第七号所載）には「此の種の如き展覧會は校内に於て未だ嘗て試み得ざりしもの故一般觀覽者に多大の驚嘆を與へ非常な賞讃を博した。」と記されている。

以上のような本校内外の気運の向上は、昭和八年の臨時版画教室開設の大きな推進力となった。

① 昭和初期の彫金科

荒木敬蔵氏（昭和八年金工科彫金部卒）の回想（昭和六十一年七月十三日付書簡）と増田三男氏（昭和九年工芸科彫金部卒）の回想（昭和六十一年五月二十一日談話筆記）および提供資料による。

○荒木敬蔵氏書簡より

授業内容

入学当初一、二年には専攻の実技実習の外に造形芸術の基礎教養として、デッサン、日本画、彫塑の実技、講義として、東洋・西洋美術史、建築、工芸史金工製作法、正木校長の修身（美術講話）等々を学んだ。

専攻の実技は教養科目受講の合間で随時金工室で行なわれた。教室は特に学年別にあるのではなく、一、二の特別研究室を除き、一室共同使用で先輩の実習作業を見学しながら眼と耳と手を通して賑やかに勉強した。

実技内容は、当初は先輩の鑿を参考に鑿作り。助手の宮坂福太郎さん（御老人）の懇切な指導が思い出される。次に彫金。雷文、鱗文、青海波、雲文等の毛彫り、うす肉彫、銀平象嵌で、手本により手板を作った。技が進み、学年が上るに従って、学校所蔵の加納夏雄、海野勝珉先生等の学生指導のために残された薄肉彫り、片切彫り等の手板の貴重な資料による模刻。後藤家歴代の装剣小道具の手本をたっぷり時間をかけて模刻した。

清水、海野、深瀬先生出勤の日には、全学生が夫々に十分の時間をとって個人指導をいただき、先生のお話を伺うことで、両先生の崇高な芸術にうたれ、その偉大さに感じ入った。清水先生の永年にわたる鑿と金槌によって鍛えられた大きな握りこぶしで、冗談に背中を一発でーんと叩かれる「愛のげんこつ」が今も懐かしく思い起こされる。

彫金以外、鍛金教室、鋳造、漆工教室へも気軽に出入し、先生